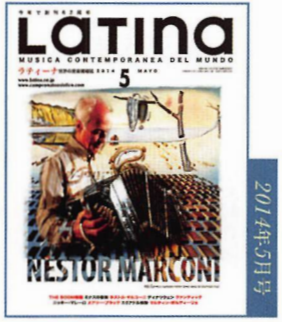
濱瀬 元彦
Motohiko Hamase

●ジャズ・ベーシスト／「濱瀬元彦 *E.L.F.Ensemble*＋菊地成孔」で音楽の新しい形を追求している。著作も多く、近著は『チャーリー・パーカーの技法 インプロヴィゼーションの構造分析』(岩波書店)

この号でラティーナが休刊とのこと、非常に残念に思う。他の音楽誌に較べて掲載されている評論の質が高く(音楽について書き手が正直で虚構を言っていないという意味)、本当のことが書かれている比率が高い貴重な雑誌だったと思う。このような場に私を執筆者として迎えていただいたことを光栄に思う。そこで印象に残っている記事とのことだが、まず最初に思い出すのは花田さんがまだ編集長になる前と記憶するが2014年5月号の「新世代ミナス音楽」という記事だ。花田さんはすでに「ヘシクロ・ジェラル」というキーワードを発見していて、彼からの指示はそれを軸にマケリー・カ、クリフトフ・シルヴァなどの第一新世代、さらにアレシャンドリ・アンドレスに代表される第二新世代を調査し、それらの代表的な作品を挙げて解説せよ、というものだった。「ヘシクロ・ジェラル」とはこの号で花田さんがクリストフ・シルヴァに行ったインタビューで明らかになり、ミナスの12人の作曲家が未発表曲を発表する2002年から1年間続いたイベントのことであった。『*A Outra Cidade*』という作品はこの成果である。一方、私はブラジル音楽の単なる愛好者でしかなく、問題となるミナスの状況調査など全くしたことはない。この問題に関する論考、文書など私の知見の範囲では日本には存在しないため海外のサイトをネットで調べるしかなかった。また当時、私はポルトガル語が全く読めなかったのでグーグル翻訳で英語に変換しつつ、手探りの作業のなかで状況を把握する必要があった。そんなことをやっているうちに、ミナス・ジェライス連邦大学出身者とウアクチの存在、これらエリート音楽家に対置されるノン・エリート音楽家という大雑把な構図、それら相互の人間関係が少しずつ見えてきて、第一新世代ミナス、第二新世代ミナスの関連性と違いも少しだが分かってきたのである。諜報インテリジェンスというのはおそらく、こんな仕事なんだろうなと思いつつの原稿執筆であった。その後、花田さん、江利川さん、NRTの成田さんと一緒にこの記事をもとにした小さなイベントをやったことも、今となっては楽しく思い出されるのである。



2014年5月号

◉ *Alexandre Andrés*「*Um Som Azul*」

Question ◉出会いと別れの季節に聴きたくなる大切な1曲